

# にしっこ 西っ子のみなさんへ 113 10月8日

10月8日は「木の日」です。

日付の「十」と「八」を組み合わせると「木」の字になることから、木についての認識を深め、木材を使ってもらおうという日です。

6年生は11月1日に「奈良研修」に出かけ予定ですが、「東大寺」と「法隆寺」を主に見学してきます。

東大寺大仏殿は、世界最大の木造建築として知られています。84号でも紹介しましたが、何度も焼失しており、現在の東大寺は江戸時代に造られたもので、創建時のものの3分の2（幅）ぐらいしかありません。それでも一番大きいのですから、創建当時に見た人はとてもびっくりしたのではないのでしょうか。

寺社建築の主要の木材はヒノキです。関西圏にあった巨木は、歴史の早い時期に使われてしまったので、鎌倉時代の再建時には、山口県のものを瀬戸内海→淀川→木津川→奈良のルートで運んできたようです。

現在の江戸時代に作られたものは、ヒノキの調達ができず、柱に杉が使われたり、集成材が使われたりしています。大仏に向かって右奥に「大仏さんの鼻の穴と同じ大きさ」の穴が開けられて柱がありますが、その穴を見ると集成材であることがわかります。

「法隆寺・五重塔」は、聖徳太子が建立した世界最古の木造建築として知られ、約1300年という長い歴史を持っています。なぜ、それほどにも長きに渡り、地震にも耐えてこられたのでしょうか。それは、「積み上げ構造」という建築方法であるとされています。五重の各重は上に行くほど細くなっていて、各重は下の重の上に乗せてあるだけで一重ごとに独立した構造になっています。建物全体を一体化した「剛構造」ではなく、堅固に結合しない「柔構造」にしてあり、地震が起きたときは各重が互い違いに振動して「揺れ」を吸収する仕組みになっています。

また、塔の中央には「心柱」という柱がありますが、この柱の周囲は吹き抜けになっていて、建物全体を支える構造にはなっていません。実は心柱は制振ダンパーの役割をしていて、塔自体が右に傾こうとすると、心柱は左に動いて、塔が倒れないようにしているのです。この仕組みは、東京スカイツリーにも使われています。

古の工人たちは、木の性質や性格を熟知し、それを生かして建物を造ったのです。その技術は、現在の最新技術をも凌ぐものだったといえるのです。



